

在日外国人生徒の進路選択における困難と支援

—在日中国人生徒を事例として—

郭 莹／齊藤 ゆか

1. はじめに

「在日外国人生徒」とは、日本に滞在・在住している外国籍である生徒（両親の両方またはどちらかが外国籍の親）を指す。「外国につながる子ども」や「外国にツールを持つ子ども」とも呼ばれる場合もある。本研究は、在日外国人生徒の進路選択の現状や困難を把握し、その支援のあり方を検討することを目的とする。

この在日外国人児童生徒が急増した背景には、1990年の入管法改正及び就労条件の緩和に伴う、長期滞在をする外国人労働者¹の受入拡大にある。同時に、日本での就学希望者が増えた。文部科学省（2018）によれば、「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒」は93,133人、うち「日本の公立に在籍している外国籍の児童生徒」は40,485人は、2008年（28,575人）から10年間で倍増している。宮島（2014）は、「義務教育に当たる初等教育では、該当年齢の外国人で日本の公私立の学校に通っている者は6割前後」であり、「残り4割はその実態」が不明という。この「不就学問題」は、在日外国人生徒の重要課題の一つといえる。不就学に陥る要因として、小島（2016）は①制度上の問題、②労働上の問題、③公立学校の受入体制の問題を挙げた。その上で、不就学問題をはじめ、日本語指導の教員養成や日本語教育の充実や公立高校進学を目指す生徒の継続的な支援など、外国人児童生徒の教育制度の課題解決の必要性を強調した。そもそも外国人の子どもは、就学義務が課されておらず、あくまで本人・保護者の希望に応じて公立学校や外国人学校への入学が行われる。それゆえ、学齢簿に在籍管理が課されていない問題を孕んでいる。

2019年、法務省は「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（2020年度改訂）」が決定された。このうち「生活者としての外国人に対する支援」として、「(3) 日本語教育の充実」「(4) 外国人の子供に係る対策」が挙げられた。進路選択に関しては、「外国人

¹ 法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）」の「国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人」統計（2018年12月）によると、在留外国人総数は2,731,093人の中、中国籍は764,720人で約28%を占めている。

生徒等の進学状況、中退率、進路状況等に関する実態を踏まえ、中学校・高等学校において将来を見通した進路選択の機会が提供されるよう、教育委員会・学校と関係機関が連携し、日本語指導やキャリア教育の充実、生活相談の実施等の包括的な支援を進める」ことが明記された(法務省2020:27)。これらは、外国人児童生徒に対する進路選択等を含む教育的な取組が、未だ途上段階にあることを意味している。

2. 在日外国人生徒の進路選択をめぐる先行研究

学齢期の生徒にとって、進路選択は、将来のキャリアを左右する重要なライフイベントである。それは、在日外国人生徒にとっても同様である。本研究は、個の生涯ライフの視点から検討を行うものである。

そこで、まず在日外国人生徒及び進路選択に関する先行研究を把握しておきたい。本研究のキーワードは「外国人生徒」「在日外国人生徒」及び「進路」「進路選択」とする。国立情報研究所サイトCiNii検索システムによると、「外国人生徒」117件(1992—2020年)、「在日外国人生徒」5件(1995—2018年)で、1990年以降の研究課題となっている。これに「進路」を加えた場合、「外国人生徒」と「進路」で20件(田巻ら2012, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 若林2015, 渡辺2014, 山崎2005, 広崎2003, 辻本2003)、「中国人生徒」と「進路」で1件(堺谷2003)、「在日中国人生徒」と「進路」で1件(李・佐野2012)のみとなる。

これら外国人児童生徒をめぐる共通課題は、「日本語の指導教育・学習」に関する研究である。横山(2006)は、在日外国人生徒が「日本の学校で抱える不安や問題は、第一に言葉の壁」とした。「自分の気持ちが通じないことから友達ができず、孤立する子どもも少なくない」。第二に「学習の壁で、日本での滞在が長い生徒は自然に日常会話はできるようになる。しかし、学習言語の習得は困難であり、特に漢字が学習の大きな壁」という。つまり、外国人児童生徒にとって、言語と学習は喫緊の課題と言えるのだ。

在日外国人生徒の進路選択に焦点化すると、山崎(2005)、広崎(2007)、鍛冶(2007)、李・佐野(2012)、坂本(2013)、小島(2014)、渡辺ら(2014)、酒井(2015)など多数の研究が散見される。どの論稿も、日本の高校進学への困難さに言及している。

外国人生徒の進路状況調査(栃木県)を毎年実施する田巻(2015)は、「日本語指導が必要な外国人生徒が一般の学力試験を受験して高校や大学に進学することは極めて困難」で、進学率ははるかに低い現状を指摘する。また、坂本(2013)は、「高校入試の特別措置だけでは、外国人生徒が学校からドロップアウトすることを防ぎ、高校受験に向けたモラルを形成・維持することが困難」とする。さらに、渡辺ら(2014)は、「高校進学

外国人生徒が徐々に増える」一方、「高校入試を乗り越えて高校進学できたにもかかわらず、入学後の高校でのケアやサポートが少なく、展望が見えないままに中途退学する外国人高校生は少なくない」ことを指摘する。

こうした外国人児童生徒の困難な現状に対して、三本松（2014）は、彼らが自らの将来像を描ける自立支援の必要性を強調し、次の4点を提起した。(1) 外国人児童生徒の将来像が描けないため、十分納得がいく支援ができないこと。(2) 高校では日本語指導が殆どないため成績不振で中退も多く、働こうと思っても外国人派遣労働者の待遇で扱われてしまうこと。(3) 彼らへの支援は、児童生徒と保護者が主役であり、本人を自立させること。(4) 彼らの将来を考えて、長期的に見ていくこと、とする。また、外国人集住都市会議（2018）においては、外国人児童生徒の「今後の進路や将来設計について自ら考えることができる機会を設けたキャリア教育の取組」の強化を提言している。これらは、本研究に重要な示唆を与えるものである。一方、小島（2014）は、「外国人の高校進学希望者のために各地域ではボランティアが尽力」しているが、「自治体別高校入学者選抜の実態が不明」のため、各地の実態が比較できない」という課題を挙げている。そこで次項では、在日外国人生徒（当事者）からの実態把握に努めたい。

3. 在日外国人生徒の進路選択に関する実態調査—在日中国人生徒を中心として—

ここでは、在日外国人生徒の進路選択の実態を探るために、3つの独自調査を行う。研究対象者は、在日中国人生徒を中心とする。下記、調査概要を述べておく。

(1) 第I調査の概要（アンケート調査・インタビュー調査）

第I調査では、来日3年以内の在日外国人生徒（中学生・高校生）を対象に現在の生活状況や進路希望に関するアンケート調査を行った。調査方法²は、T市内の外国人支援NPO及びY市内の公立高校の協力を得て、2019年7月～11月を調査期間とした。

調査協力者は、在日外国人生徒32名。中学生は外国人支援教室に通う生徒16名（うち在日中国人13名）、高校生は在県枠（来日3年以内）で進学した公立高校生徒16名（うち

2 ①中学生を対象とした調査では、日本語が十分ではない外国人生徒のため、生徒をサポートする3名（NPO法人（G教室）の担当者Eさん、ボランティアの先生Aさん、Bさん）の全面的な協力を得た。調査時間は、1回につき1.5時間程度で、第1回は5人、第2回は5人、第3回は6人でアンケート調査の説明を行うインタビュー調査を行った。②高校生を対象とした調査では、K大学教職課程の教員の調査協力を得た。調査協力校は、Y市内の神奈川県「在県外国人等特別募集」の実施校M高校である。校長先生に協力依頼を行い、調査を2回実施した。1回目は、日本語教室で1時間程度外国人生徒6人に対するプレ調査を実施（2018年11月）。2回目は、元校長及び外国人生徒の支援担当O教諭の協力を頂き、調査票を生徒16人に配布・回収した（2019年10月）。

在日中国人8名)である。在日中国人生徒は全体の66%を占める。アンケート調査用紙は中国語版も準備した。また、中学生の調査は、調査内容の読取りや理解が困難なため、NPOスタッフも同席し、母語で内容説明を加えながら一問ずつ丁寧に質問を行った。

尚、本調査は「神奈川大学における人を対象とする研究に関する倫理審査」(2019年5月)を受けた後に実施した。本研究で研究協力を行った個人に対しては、名前を特定化できないよう匿名とした。団体や学校等に対しては、その活動記録を論文等で表記の承認を得た。

(2) 第II調査の概要 (インタビュー調査)

第II調査では、在日外国人学生を対象に、来日から現在に至るまでの進路選択のプロセスについて、ライフヒストリーを中心に据えたインタビュー調査を行った。調査協力者の選定に際し、次の2点を条件とした。①日本の中・高・大・大学校経験があり、外国ルーツを持つ学生または社会人であること、②筆者が調査等に出向ける移動可能範囲内であること。K大学内の留学生から探し、3名(在日中国人)から協力を得られた。

調査は2018年7月から2019年11月まで、複数回にわたり各3時間程度の調査を行った。調査協力者の言語能力に応じて、日本語と中国語を両方使用した。調査内容は、①来日の経緯と日常生活(学校、家庭、放課後等)の過ごし方、②日本語教育の修得方法や学校外支援を得られたが否か、③日本の学校教育(小中高・大学)での経験、④進路選択に対する希望や考え方、⑤在日中国人生徒に対する支援の在り方である。方法として、半構造化面接法を用い、発語は全て許可をとって録音し、文字起こしによりデータ化した。分析にあたっては、インタビューで得られたナラティブデータを読み取り、解釈した分析を行い、表の作成等を試みた。しかし、全文掲載は紙幅の都合上難しいため、研究目的に照らして特徴ある言説のみを用いた。尚、倫理的配慮については上記同様である。

(3) 第III調査の概要 (クドバス手法を用いた在日中国人学生によるワークショップ)

第III調査は、在日中国人学生(当事者)が来日後の経験や悩みを共有した上で、在日中国人生徒が自立できる環境やその支援のあり方を討議した。調査協力者は、いずれも日本の大学に在籍する中国人学生5名である。内訳は、大学生2名(男1名、女1名、来日5年以上)及び大学院生3名(男1名、女2名、来日3年未満)となる。

方法は、上記をテーマに自由討論を行った後、森(1998)に基づきCUDBAS手法を用いたワークショップ(WS)作業を行う。一人20点程度の課題や支援策に関する記述を行い、分類作業を行いながらキーワード抽出を行った。討議及びWSは全て中国語で行った(調査は2018年10月19日の約3時間)。作業時間は全6時間程度である。倫理的配慮は上記同様であり、発語はすべて許可を得て録音を行った。倫理的配慮については上記同様である。

4. 調査結果と考察

在日外国人生徒の進路選択に関する調査結果は、次の通りである。

(1) 在日外国人生徒の生活実態

第 I 調査は在日外国人生徒（中学生・高校生）に対して、①生徒自身のこと、②学校生活、③放課後の生活、④進路や将来の希望等、主に 4 つの設問を行った。下記、特徴ある点のみ記しておきたい。

①生徒自身：中学生 16 名（中国籍 13、ネパール籍 3）は、親都合で来日して 1～3 年以内が大半を占める。高校生 16 名（中国籍 8、フィリピン 6、タイ 1、エストニア 1）で全て「在県卒」で進学した。交友関係について、中学生の 50.1%は「友達作りは難しい」とする。悩みや心配で最も高いのは「勉強や進学」であり、次いで「日本語」「友人関係」とする。その他、「いじめ問題」「中国とのギャップ」「学習言語」などが挙げられた。表 1 の記述は、悩みの深刻さを物語る声を焦点化したものである。

表 1 在日中国人生徒（中学生）の悩み

<p>a さん (14歳男子)</p>	<p>因为我日语不太好，所以在班里也不太跟日本同学讲话。但是不知道为什么他们会欺负我，之前有人故意推过我，也有拿东西砸我的。班里有中国人同学，但是就算知道我被欺负也没有帮我什么。有跟爸妈讲过被欺负的事情，但是我爸觉得不是太严重的事情也没有太管。</p> <p>（訳：日本語がうまく話せないから、クラスで日本人とあまり話をしないのですが。でも、彼たちの理由が分からないが、私はいじめられたことがある。押されたりとか、物を投げされたりしたことがありました。中国人のクラスメートもいますが、私がいじめられたことを知っているても助けてくれないです。いじめられたことは親と話しましたが、お父さんがそんなに大したことじゃないと思うから特に関与しなかったです。）</p>
<p>b さん (15歳男子)</p>	<p>我在国内的时候各科成绩都还行，但是来了这边之后除了英语和数学之外真的感觉太难了，理科还可以，国语和社会的日语汉字和片假名太多而且很多都很像，真的非常苦恼。</p> <p>（訳：中国にいる時は各教科の成績が普通レベルはあったが、日本に来てから英語と数学以外は本当に難しいと思います。理科はまだ大丈夫ですが、国語と社会は日本語の漢字と片假名が多いし、しかもほとんどが同じように見えています。本当に苦労しています。）</p>
<p>c さん (16歳男子)</p>	<p>我刚来日本没多久，上课的时候除了偶尔能听到几个学过的词之外老师讲什么基本都听不懂。虽然跟支援教室的老师说的话教科书上的内容会再给我讲一遍，但是时间有限，没弄懂的东西还是有很多。</p> <p>（訳：日本に来てまだ時間が経っていません。授業の時はたまに学んだ語彙以外は先生が話していることが全然分かりません。支援教室の先生に言ったら、もう一度教科書の内容を教えてくださいますが、時間が限られていますので、分からないものがいっぱいあります。）</p>

注：訳は郭による。

②学校生活：中学生は日本語に自信ある69%である。また、勉強に自信ある43%である一方、勉強の自信ない57%、学校生活が楽しくない43.7%と約半数を占める。高校生は日本語・勉強も自信あり8割程度で、高校進学を叶えた層との相違がある。

③放課後の生活：中学生は「ゲーム」時間が多い。「特にやることがないからゲームをしている」という。一方、放課後を利用した国際教室では「日本語が前よりうまくなせようになった」「支援教室の先生たちが皆優しくて、宿題を見てくれてよかった」「友達もできた」などが聞かれた。国際教室は居場所の役割となっていた。

④進路や将来の希望：将来について「考えている」「考えたことがある」を含めると、中学生は93.7%、高校生は100%を占める。進学先として、中学生は「特別選抜」の高校受験を希望し、高校生は大学進学希望が87.6%を占める。進路の相談相手は「保護者」が最も多い。次いで中学生は「友達」、高校生は「先生」の傾向にある。中学生は、将来に対する明確な認識や目標がないため、漠然とした不安を持っている。一方、高校生はキャリア教育を受講し、進路選択に対する意思をもつ様子が散見される。

(2) 在日中国人学生の来日から進路選択までの困難と支援ニーズ

在日中国人学生（当事者）として日本での生活経験に基づき、上記5点に関するライフヒストリーを語った。下本文の「イタリック」内は調査協力者（A氏、B氏、C氏）の口頭内容である。基本的には括弧内はママとするが、訳語が不明の場合は一部変更した。

①来日の経緯：表2の通り、小・中学校の学齢期に親都合により来日した。A氏は来日時の心境について「特に嫌じゃなかった。お母さんと長く離れて生活していたので、一緒に暮らす期待が強かった」とする。また、C氏は、「最初は再婚相手の父親に母親を取られて感覚がありました」と語った。

②日本語の修得と学校外支援：まず、日本語の修得は三人共に苦心したとする。B氏は「日本語を話せないことで、学校も生活も最初の1～2年は本当に苦しんでいた」。また、C氏も「中2年で日本の公立中学校に転校して、日本に来てから2年半は日本語が雑音でしたね。中3では日本語はわかるけれど、自分から話せない状況で『はい』か『いいえ』しか言えないし、言いたいことも伝えられないもどかしさがあった」という。一方、A氏は、「フリースクールの先生たちには本当に感謝している」また「高校のときは『取り出し授業』があって（中略）小さなクラスを作って、簡単な日本語で分かりやすい授業」を受けた。A氏は、教育機会の重要性を強調する。

③日本の学校教育の経験：C氏は、「外国ルーツの皆さんは殆ど経験しているはず。日本の生活になじめないということ。特に日本の暗黙のルールはわからない。でも、排除されたくないと思う」。「高1の時にいじめにあいました。親は悲しそうにしていますが、先生に行っても仕方ない状況でした。理由は、日本人の感覚が分からない」。続けて、「多

表2 在日外国人学生の属性と来日経緯等について

氏名	属性（調査時）			①来日・経緯			②日本語教育	③日本の学校教育の経験		調査回数 (時間)
	性別	年齢	学年	来日年	来日年数	来日経緯	教育機関(期間)	編入時	教育暦(経歴)	
A	男	23	大学3年	2012	7年	母の再婚(日本人の父に)	横浜市鶴見区のNPO法人フリースクール(1年間)	高1	小・中学校は中国の教育。高校から県立高校。推薦で私立大学に入学。卒業後は市役所(公務員)。	3回 3H
B	女	20	大学3年	2010	9年	父の就労	日本語教室(2年間, 週2ペースで通う)	小6	小学校は中国の教育。中学・高校は日本の公立中学校・県立高校。推薦で私立大学に入学。卒業後は日本の企業に就職。	2回 3H
C	女	33	大学4年	1996	23年	母の再婚(日本人の父に)	日本語教育に通う	中2	小学校は台湾で教育。架橋の学校で一年間勉強し, 中学2年に公立中学校に転入。高校は日本の私立学校。高校卒業後に就職。結婚・出産。2015年社会人入試で私立大学に入学。	2回 2H

くは中国人の名前を捨てて、高校から日本人の名称を名乗る人が大半だった。(中略)それは自分の心許せる人しか話さないし、少しくらい訛っていても中国人とはわからない」という。日本の学校文化に馴染むことの難しさや苦しみを当事者として語った。

④進路選択に関する考え方：進路についてA氏は「絶望しました。半年間、引き籠っていました」とした。C氏は「中学の頃は特に考えることもなかったですね。将来については、漠然として、希望もなかった。夢を語る前に、日本語が分からない。(中略)友達ができるかどうかという不安の方が大きかった。差別する人もいるし、そこの部分も含めて迷いや不安があった」とする。また、進路の相談者については、三人共に親(保護者)より教員を頼っていた。B氏は「親は日本の学校制度や進学などについて詳しく知らない」とし、C氏も「外国人の母親は進路については教えられない。(中略)親が頼りにならない場合、自分で調べないといけないでしょう。でも、自分の成績、自分がどこの高校に入れそうか、偏差値というのも初めて知った」とする。

⑤在日外国人生徒への支援のあり方：表3は、在日外国人学生らが作成した支援項目である。インタビュー調査で述べられた主たる支援内容は、次の5点である。第一は、「寄り添う」や「心理的ケア」を行うこと(1-1に関連)。A氏は「とにかく『寄り添う』こと

表3 在日外国人生徒との共生に向けた教育・生活環境の整備

対応策	NO.	水準	必要な支援項目 (例)
外国人生徒の教育 (学校内外)	1-1	A	なるべく積極的に日本人生徒と交流している
	1-2	A	日本語の授業が分かるし、理解できている
	1-3	A	勉強についての個別指導を受けることができる
	1-4	A	学校内で日本語支援を受けている
	1-5	B	定期的に担任先生や相談室などの先生と相談できる
	1-6	C	卒業した外国人先輩から指導や支援を受けている
日本人生徒や教職員に向けた多文化共生教育	2-1	A	教職員と日本人生徒に対する国際教育を進んでいる
	2-2	A	外国人生徒と日本人生徒の交流機会を増やすことができる
	2-3	A	学校内に外国語通訳やボランティアが設置している
	2-4	B	体育や芸術に関する授業は日本人生徒と一緒にしている
	2-5	B	部活は外国人生徒に対する積極的な姿勢や取組みができる
	2-6	B	外国人生徒に対する情報 (活動や進学など) の伝達や説明をきちんとできる
日本で生活していく家庭支援	3-1	A	高校生の場合は親からアルバイトの時間を制限している
	3-2	A	親からの経済的な支援を十分受けている
	3-3	A	他の外国人家族の交流ができる
	3-4	B	母国と日本の社会価値観の違いを子供に理解させることができる
	3-5	B	親は子どもの趣味を理解し、応援することができる
	3-6	C	生活に母国語と日本語のバランスをコントロールすることができる
	3-7	C	必要があれば家庭教師 (自費/ボランティア) の支援を受けることができる
外国人との共生に向けた地域・環境整備	4-1	A	学校外 (行政/企業/NPOなど組織) から日本語支援を受けとっている
	4-2	A	外国人に対して情報 (地域活動や新政策など) を正しく伝えることができる
	4-3	B	外国人向けの福祉政策が充実している (生活上の支援)
	4-4	B	地域はボランティア団体や大学などと連携させ、ボランティアの人数を確保できる
	4-5	C	地域で日本人住民に対する多文化共生社会理念の教育を行っている

注1：在日中国人学生 (5名) で作成を行った。その後、郭が並べ替え、中国語から日本語に訳した。

注2：外国人集住都市会議 (2018) を参考にした。

が大切。(中略) 子どもの家庭環境は一般より複雑のケースが多く (中略) 親の話はタブーだし、異母兄弟の気持ちは複雑だし、触れられない。(中略) 本人が一番つらいと思います。だから、困っていたら『そうだね』と頼る人がいる、寄り添う人が誰かいてくれたら』とする。また、B氏は、「来日したばかりの外国人生徒は不安を持っている人が多い。日本語支援はもちろん、心理的なケアも必要だ」とする。第二は、「よろず相談」のような居場所があること (1-3, 1-5に関連)。C氏は「うちに帰ったら家事を手伝ったり、兄弟の世話をしたりしてなど悩んでいる生徒がいる。それが原因で勉強や生活に悩んでいる数は少

なくない。「僕は各段階で助けてくれた人がいた。自分がいろいろな支援を受けてきたので、同じように悩んでいる生徒をサポートしたい」。第三は、「ロールモデル」の存在を示すこと(1-6に関連)。B氏は「自分がそうなりたいていう気持ちは変わると思います。いつも前向きにすることが重要です」。A氏も「外国人の子どもの成功例のモデルケースを創り出すことが大事だ。(中略) 同じ境遇の人が共感しあえば、乗り越えられるはず」とする。第四は、保護者への多言語対応を行うこと(2-6に関連)。学校の説明会、入学説明会、合格者説明会、入学手続き、保護者の連絡、三者面談などの各種行事に際し、随時通訳を配置するなどの多言語対応の必要がある(A氏)。第五は、在日外国人へ日本人の関心を高めること(4-5に関連)。A氏は「外国人生徒との関わりに無関心の日本人や若い教師層が数少なくない」とする。こうした教職員への研修は今後の課題といえる。

以上から、筆者が着目したのは次の2点である。第一に、家庭環境や学校外の支援の有無は、来日以降の進路選択に大きな影響を与えていること。第二に、ロールモデルになり得る在日外国人学生は、来日外国人生徒(子ども)に対する関心が高く、当事者視点から支援者に転じる可能性が高いことである。

5. 在日外国人生徒の進路選択に向けた困難

調査結果から、在日外国人生徒の大半は、本人の意志ではなく親都合で来日していることが明らかとなった。したがって、将来を自分の意志で見出すには時間が要する。在日外国人生徒の進路選択の困難として「言葉の壁」「人間関係」「居場所の無さ」「心理的なケアの欠如」「目標の設定」の5点が挙げられる。図1は、来日から現在まで起こる在日外国人生徒の困難を例示したものである。

第一の困難は、「言葉の壁」である。外国人児童生徒は「日本語がわからな

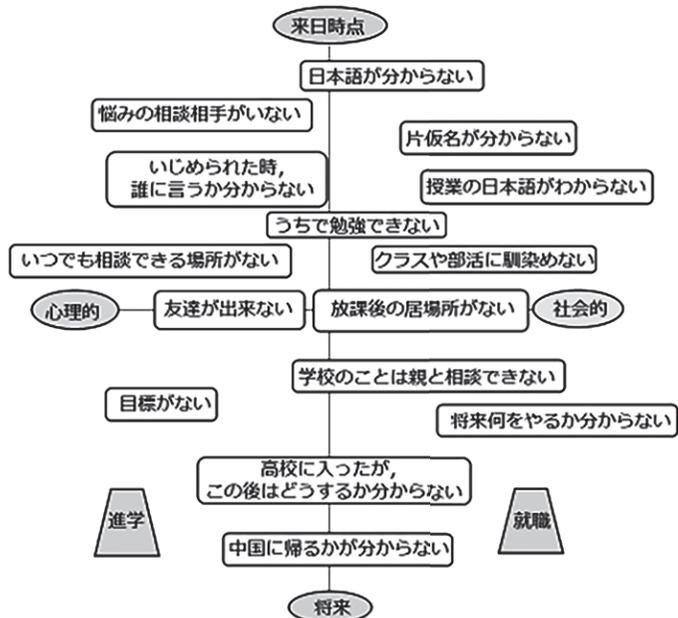


図1 在日外国人生徒の進路選択に至るまでの困難

い」ゆえに、コミュニケーションや学習面で大きな困難が生じる。在日中国人生徒は、漢字の習得が非漢字圏の生徒より有利な条件にある。それでも三つの調査から、日本語と学習に大きな困難が生じていることは明白である。在日外国人生徒の「言葉の壁」は学力不足につながり、進学という進路選択を阻んでいる。

第二の困難は、「人間関係」である。在日外国人生徒（中学生・高校生）は「学校内の友達づくりが容易ではない」「頼りになる人が少ない」「相談相手がいない」などの悩みを持つ。外国人として友達作りなどの「人間関係」の難しさは、自尊心の低さや将来への不安に直結している。

第三の困難は、「居場所の無さ」である。在日外国人生徒は、部活を含めた放課後が充実していない。また、家庭事情などで「放課後の居場所がない」実態が露わとなった。彼らの放課後は「ゲーム」や「家の手伝い」などに時間を費やし、充実しているとは言い難い。このことから家庭以外の居場所が不可欠である。

第四の困難は、「心理的なケアの欠如」である。在日外国人生徒の「人間関係」の困難性や「居場所の無さ」などは、心理的な問題にも直結している。第Ⅱ調査では、「支援者として触れない心の傷などに何にも出来ない無力感が強い」「家庭以外の心が寄り添う人や場所が求められている」など心理的ケアに関する要望が出された。また、コミュニケーションや相談の必要性は、第Ⅱ・Ⅲ調査でも言及された。これまでの生活を中断して国境を越えて来日した外国人生徒は、これからスタートする生活不安に陥る可能性がある。そのため、来日後も自律的に過ごせる心理的なサポートが必要となる。

第五の困難は、「目標の設定」である。長期的に将来の展望を持つ困難さは、在日外国人生徒の進路を阻害している。外国人生徒の進学率は、日本人生徒に比べかなり低いことが先行研究から明示された。高校進学の場合、学力が日本人生徒より低い外国人生徒は、「特別入学枠」と「日本人と同じ受験」の二択しかない。しかし、「特別入学枠」は人数が限られ、進学はかなり厳しい状況にある。高校進学までの「目標設定」も重要だが、高校入学してからの「目標設定」も大切である。第Ⅱ調査において、高校時代は進路を一番迷った時期であることが分かった。高校入学後、将来の展望が見えず、学校生活を継続する厳しさを述べていた。そこで、高校入学後も「目標の設定」も持ち続けることが重要性を強調したい。

このように在日外国人生徒の進路選択にあたり、「言葉の壁」と「目標の設定」の困難さは共通課題である。将来の見通しが立たず、不安を抱える在日外国人生徒は複合的な困難を有している現状が明らかとなった。

6. おわりに —在日外国人生徒に対する自立支援と残された課題—

本研究では、在日外国人生徒をめぐる進路選択の実態とその困難を述べてきた。そこで、彼らが人生の選択肢を広げた進路選択や自立につながる支援策を提示したい。

まず、在日外国人生徒の進路に関する実態把握を全国的に行うことである。現在、外国人生徒の進路に関する実態調査は、各自治体での比較が難しく地域格差が大きい。今後、外国人生徒の進路選択の実態把握やそうした全国の統計整備が不可欠である。

次に、在日外国人生徒への日常的サポートを多角的に行うことである。在日外国人生徒のサポートは、言語や学習支援のみならず、人と人とのつながりや人間関係を創るなどの交流支援、公共施設等を活用した放課後の居場所支援、生活の悩みや将来の不安を気軽に話せる相談支援などが必要となる。特に、在日外国人生徒の心の支えを継続的に行うことが重要である。その支え手として、来日経験者（外国人）が有効である。第Ⅱ調査のように、来日経験者が被支援者から支援者に転ずる可能性に期待したい。

さらに、在日外国人生徒との共生に向けた教育・生活環境の整備していくことである。表3のように、「外国人生徒の教育（学校内外）」「日本人生徒や教職員に向けた多文化共生教育」「日本で生活していく家庭支援」「外国人との共生に向けた地域・環境整備」等を包括的に支援し、外国人全般にとっての暮らしやすさが望まれる。

最後に、残された研究課題について、次の3点を示しておきたい。

第一課題は、困難を有する子どもへの調査（量的調査・質的調査）は容易ではないこと。まず量的調査にあたり、学校教育における調査や、困難を有する生徒に限定した調査に限界があった。またインタビュー調査に際して、研究協力者との信頼関係を築くのに多大な時間を要する上、本音を引き出す難しさがあった。その際、研究協力者の背景となる家族（親の婚姻状況と経済状況など）は、介入できない場面が多々あった。

第二課題は、進路選択と職業・ライフ・キャリアにまで結び付けた言及ができていないこと。本研究は「進路選択」をテーマとするが、結果的に「学習支援」と「進学支援」が中心となり、将来の職業との接続に関わる部分には踏み込めなかった。今後はライフ・キャリアの視点をもった分析が課題となる。

第三課題は、在日外国人生徒をサポートする支援者の視点から検討ができていないこと。調査時には、支援者（学校教育では国際教室の担当教員、学校外教育では外国人の子ども支援を行うNPOの代表やそのスタッフ等）にもインタビュー調査を行い、情報収集に努めたものの、本稿には反映できなかった。

以上から本研究は、在日中国人生徒の進路選択における困難と支援はユニバーサルなレベルに留まったものの、彼らを取り巻く日本社会で遭遇する諸課題をリアルに見出すこ

とができたと思われる。今後も、在日外国人生徒の進路選択にあたり、自由に進路を選択できる学習環境づくりを目指していきたい。

終わりに、本研究にご理解と調査協力を頂いた方々に心からお礼を申し上げます。

【引用文献】

- 外国人集住都市会議 (2018) <http://www.shujutoshi.jp/2018/report.pdf> (2021.01.01. アクセス)
- 広崎純子 (2003) 「公立高校における日本語指導の位置づけ」『拓殖大学日本語紀要』(13) pp.135-144.
- 広崎純子 (2007) 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択」『教育社会学研究』80,pp.227-45.
- 法務省 (2018) 「在留外国人統計 (旧登録外国人統計)」 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html (2021.01.01. アクセス)
- 法務省 (2020) 「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策 (2020年度改訂)」 <http://www.moj.go.jp/isa/content/930005875.pdf> (2021.01.01. アクセス)
- 鍛治致 (2007) 「中国出身生徒の進路規定要因」『教育社会学研究』80, pp.31-49.
- 小島祥美 (2014) 「外国人生徒のキャリア形成とボランティア」『ボランティア学研究』14,pp.3-11.
- 小島祥美 (2016) 『外国人の就学と不就学』大阪大学出版会.
- 宮島喬 (2014) 『外国人の子ども教育』東京大学出版会,pp.14-15, pp.45-48
- 文部科学省 (2018) 「帰国・外国人児童生徒等の現状について」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/genjyou/1295897.htm (2021.01.01. アクセス)
- 李原翔, 佐野秀樹 (2012) 「在日中国人生徒の進学動機について」『東京学芸大学紀要 (総合教育科学系)』63 (1),pp.195-201.
- 酒井彩 (2015) 「中国人留学生の進路選択自己効力と進路探索行動との関連」『高等教育と学生支援:お茶の水女子大学紀要』6,pp.19-25.
- 堺谷朋美 (2003) 「中国人生徒の進路を考える」『解放教育』33 (2), pp. 31-36.
- 坂本文子 (2013) 「高校へ進学できた外国人生徒たち」『理論と動態』6,pp.93-113.
- 三本松政之 (2014) 『ケアとコミュニティ』ミネルヴァ書房.

森和夫（1998）「CUDBASの発展とその展望—職業能力評価の構造化と体系化に関する研究序説」『職業能力開発研究』第16巻，pp.109-127.

田巻松雄（2012～2020）「栃木県における外国人生徒の進路状況」宇都宮大学国際学部研究論集」

辻本久夫（2003）「外国人生徒の中学校卒業後の進路課題」『解放教育』33（2），pp.52-59,

若林秀樹（2015）「群馬県における外国人生徒の進路状況」『宇都宮大学国際学部研究論集』40,pp.59-68.

渡辺マルセロ他（2014）「外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦」『ボランティア学』VoL14. pp.43-54.

山崎香織（2005）「新来外国人生徒と進路指導」『異文化間教育』21,pp.5-18.

横山真梨子（2006）「日本における外国人児童生徒の教育」桜美林大学,p.6.